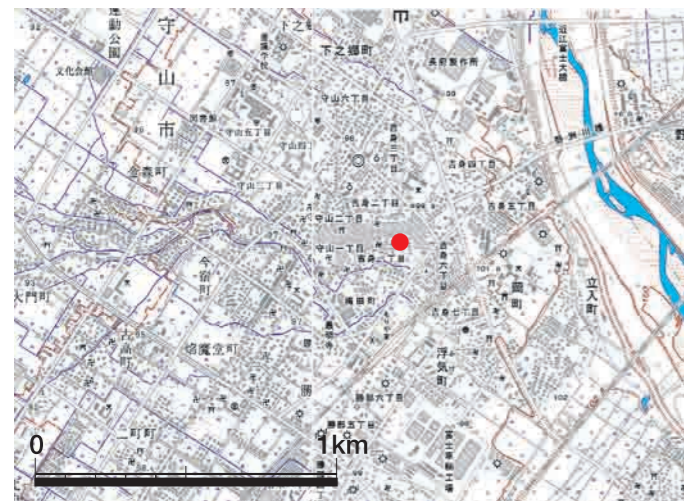


周辺のみどころ

中山道の今宿一里塚は、江戸日本橋から近江草津宿までに129か所あった一里塚の128番目にあたり、近世交通史を知る上で重要な遺跡といえる。一里塚は江戸幕府によって整備され、一里ごとに道の両側に五間四方の塚を築き、榎や松を植えて通行の目安とした。県内には中山道の他、東海道、北国街道などに設置されていたが、明治以降、交通形態の変化による道路拡幅や農地、宅地への転用などによってほとんどが消滅し、現存するものは今宿一里塚のみとなった。



滋賀県指定史跡今宿一里塚



[アクセス]

- JR琵琶湖線守山駅下車、徒歩約10分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内] (関連文献/関連施設)

- 榊拓敏「守山市慈眼寺薬師如来坐像の修理及び造立意義について」『研究紀要 第24号』滋賀県立琵琶湖文化館

慈眼寺

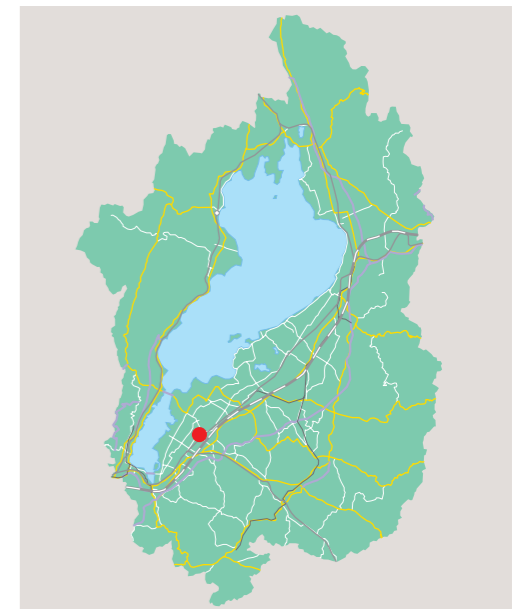
守山市吉身



慈眼寺薬師如来坐像

慈眼寺は中山道沿いの、古い民家が立ち並ぶ吉身の町中にひっそりと堂舎を構える。

本尊として安置される秘仏の十一面観音は、「帆柱観音」の名で知られている。帆柱観音は、最澄が入唐求法を終えて船で帰国の際、海上で嵐に遭遇するも、その危機を救ったことから、航海安全に利益のある仏としてあつい信仰を受けるようになった。さらに、同寺に安置される薬師如来像も海の神である住吉神との関係が指摘されており、水（海）との深いつながりを想起させる。





慈眼寺付近の旧中山道

慈眼寺

所在地 守山市吉身

慈眼寺の創建と帆柱観音

慈眼寺の縁起によると、本尊の十一面観音像（帆柱観音）は伝教大師最澄の自作と伝える。その由来は次のとおりである。延暦23年（804）、最澄は天台法華宗の修学のため唐へ留学し、翌年、多くの経典を携えて船で帰路に着くが、途中、海上で風雨が吹きすさび、波も激しく荒立った。船体は大きく傾き、帆柱も折れて今にも船が沈まんとした時、最澄が十一面観音に祈りをささげると、尊像が海上に現れ、風波が平穏となって無事難を逃れることができた。最澄は帰国後、航海安全の結縁として、折れた帆柱で海上に出現した十一面観音像を自ら刻み、帆柱観音と名付けた。そして像とともに小堂を建立し、寺名を慈眼寺とした。その後、延暦寺焼き討ちの際に、伽藍も兵火にかかって焼失したが、江戸時代に明神のお告げによって再建されたという。

江戸時代の享保8年（1723）から19年（1734）に編纂された『近江輿地志略』によると、当

時、慈眼寺には帆柱観音を安置する堂のほか、薬師堂、如意輪堂、地藏堂などの諸堂が存在していたと伝える。

木造薬師如来坐像と保存修理の記録

本像はかつて、境内の薬師堂に脇侍の日光・月光菩薩像（鎌倉時代中期頃）とともに安置されていた。像高145.4cmの坐像で、ヒノキの一木を前後に割り、内部を刳りぬいた後、再び矧ぎ合せたいわゆる一木割矧造で仕上げられる。作風から平安時代末期から鎌倉時代初期の制作と推定される。なお、慈眼寺は近隣に所在する馬路石辺神社の神宮寺であったとも伝えられ、由緒のある霊木から刻まれた本地仏（神本来の姿としてまつられた仏）であった可能性も考慮に入れる必要がある。

薬師如来像は近年、損傷が目立つようになったため、平成18年（2006）より保存修理事業がおこなわれた。その結果、表面を厚く



慈眼寺薬師如来坐像修理後



(修理後)

(修理前)

覆っていた漆箔が除去されて往古の姿がよみがえり、注目を集めた。

以下、修理の過程で明らかになったことを紹介する。

- (1) これまでに三度の修理がおこなわれた。
 - ①造像の当初から、像を構成する材には損傷があり、何らかの由緒ある木材を用いて彫り出されたとみられる。（平安時代末期～鎌倉時代初期）
 - ②造像から間もない時期に、部分的な修理がおこなわれた。（鎌倉時代）
 - ③素地の上に布貼り漆箔をほどこすなど、部分的な修理がおこなわれた。（室町時代か）
 - ④脚部、台座、光背などが新たに補われ、再度、漆箔がほどこされた。（江戸時代）
- (2) 造像当初は素地仕上げの像であった。

本像は、造像時、木の聖性を意識していたと考えられ、当初は木の表面そのままの仕上げとし、顔にのみ彩色をほどこしていた。現在残されている眉、髭、瞳の墨描きや唇の朱色は制作当初のものである。また、過去の修理に際して、顎の輪郭が変えられ、目鼻の造形にも大きな変更が加えられた。しかし造像当初の表情は、より精悍で厳しさに満ちていたことが判明した。